# MIDIで遊ぼう!

高野敦志

目次

はしがき

MIDIはMusic Instrument Digital Interfaceの略で、デジタル楽器を連動させるための国際規格である。Windows95や98の頃は、インターネットの通信速度が遅かったので、音楽そのものではなく、どの楽器の音をどの程度の長さで鳴らすかなどの情報のみを送信し、受け取る側の音源で曲を鳴らしていた。

また、DTM　（デスクトップ・ミュージック）では、MIDI対応の鍵盤を弾く以外に、パソコンの画面操作だけでMIDIのデータは作成できるので、演奏ができない人の場合でも、音源を鳴らすMIDIファイルは作成できた。そのため、21世紀初めまでは、MIDIファイルを公開するサイトが多く見られた。ただ、楽曲をMIDIの形で公開することで、著作権に抵触することが問題となり、オリジナル曲を公開している人を除けば、サイトからMIDIファイルを削除せざるを得なくなった。

インターネットが高速になると、音源によって再生される曲の雰囲気が変わってしまうMIDIは、次第に顧みられなくなっていった。作曲する人がDTMでMIDIファイルを作成しても、公開する場合は、音声ファイルの形でアップロードするようになったからである。こうした時代の変化に伴い、一般の人の意識からMIDIは忘れ去られていった。

僕自身はDTMに興味を持ちながらも、実際にファイルを作成したわけではない。ただ、入手したMIDIファイルを音源で再生したり、パートの楽器を変更して楽しむくらいである。ただ、かつて流行していた頃に、大量のMIDIファイルを入手した人も少なくないはずである。現時点で知り得た情報を公開することで、何らかの参考になると思い、今回このような形でまとめることにした次第である。

二〇二四年二月十九日

高野敦志

今回、「SOUNDCanvas　for　iOSをステレオで聞く」と「VSTをWindowsのMIDI音源にする方法」の二章と、若干の情報を増補した。

二〇二四年八月八日

高野敦志

今回の改訂では、「AndroidでMIDIを楽しむ」の一章を加えた。スマホで気楽に高音質でMIDIが再生できるようになった。手持ちのMIDIファイルをお持ちの方は、ぜひ試してみてください。

二〇二五年十二月十一日

高野敦志

MIDIの楽しみ方

MIDIというと、作曲者が電子楽器を演奏して、デジタル信号をコンピュータに記録したり、DTMソフトを用いてマウスで入力したりする場面を、思い浮かべる方が多いだろう。かつて、Windows98の時代まではブロードバンドが普及しておらず、ホームページで音楽を流すには、演奏する楽譜に当たるMIDIファイルのみを転送し、パソコンに内蔵されたソフト音源（ソフトシンセサイザー）などで、自動演奏させるという方法がよく取られた。外付けのハード音源、ヤマハのＭＵシリーズやローランドのＳＣシリーズなどは、主に作曲者が用いたものだが、パソコンのソフト音源が出すチープな音と違って、生演奏と聞き違えるほど、生き生きした自動演奏をしてくれる。この種の音源の特徴は、特定の楽器から録音された音を、ハードウェアによって音階の音に変化させ、エフェクトを加えたりすることで、メロディーを作り出すものである。

ただし、問題がないわけではない。楽器によって本物らしさは異なり、ピアノなどの鍵盤楽器、ギターなどの弦楽器、ドラムなどの打楽器は、再現性が高いけれども、トランペットなどの管楽器は、息の微妙な強弱が表現できず、偽物っぽい音しか出ないことが多い。

もう一つの問題点としては、ヤマハが提唱するＸＧとローランドが提唱するＧＳの規格があり、相互の互換性が不完全なせいで、例えば、ＸＧのMIDIファイルをＧＳの音源で再生すると、音が出なかったり、期待されるのとは異なる楽器が鳴ってしまったりする。たとえ、大きな破は綻たんはなかったとしても、作曲者が意図した演奏とは異なってしまう可能性が高いのである。

ブロードバンドが普及した二〇〇〇年以降、配信するファイルが小さいというMIDIの利点は失われ、作曲する場合や通信カラオケを除いては、歴史的使命を終えているといっていい。しかも、Windows　Vistaが発売されて以降、ヤマハのソフト音源S-YXG50は開発が止まってしまった。Windows　Vista以降のＯＳ付属のソフト

音源は、チープな上にヤマハのＸＧとの互換性はなくなってしまった。ＸＧ規格のMIDIファイルを再生するには、フリーでダウンロードできるMid Radio Playerをインストールすればいいのだが、同時発生音数が32に過ぎないので、オーケストラで演奏するような曲では、一部の音が欠落して発生されない。ローランドのＧＳファイルとの互換性は、不完全ながらあるが、ＸＧ規格の曲ほどは再現性が高くない。

僕の場合、ハード音源の音質の高さに惹ひかれて、一時はMU1000を買い込み、それにピアノ音源PLG150-PFや、バーチャル管楽器の音源PLG150-VLのボードを組み込んで、MIDIの曲を楽しんだりしていたが、その後はほとんど起動していなかった。コンピュータの性能が高くなったことで、高性能のMIDI関連ソフトも、動かせるようになったからである。フリーで配布されているTiMidity＋＋というソフトは、サウンドフォントと呼ばれる一種の音源を、自由に組み込むことができる。ＸＧやＧＳといった規格のMIDIファイルも、自動で判別して演奏してくれる。ヤマハやローランドのソフト音源が使えず、手持ちのMIDIファイルを再生できずに困っている方は、使用してみるといいと思う。

ｃドライブの直下に、TiMidity＋＋というフォルダを作ってインストールすることが推奨されている。あとは、TiMidity＋＋のフォルダの中にmusixというフォルダがある。その中に、好みのサウンドフォントを入れるのである。ただ、TiMidity＋＋は長らく開発が停止しており、フリーのVirtualMIDISynthの方が安定している。

問題はWindows8以上では、MIDIマッパーが廃止されているため、デフォルトではMicrosoft GS Wavetable Synthしか使用できないということである。そこで、VirtualMIDISynthのほかに、CoolSoft MIDI Mapperもインストールする必要がある。。

CoolSoft MIDI Mapperを起動したら、Default MIDI deviceをVirtualMIDISynthにして、Applyをクリックする。これによりMIDIを再生するときは、VirtualMIDISynthが使用できるようになる。

さらに、サウンドフォントを入手する。サウンドフォントの音

を、シンセサイザーがメロディーに変換するのである。無料のサウンドフォントがネット上にあるので、気に入ったものをダウンロードしておく。もし高性能のパソコンをお持ちなら、サイズが４ギガもあるHiDef.sf2などを試すこともできるだろう。ＸＧとＧＳの互換性が高いようだ。ただし、7Zという特殊な形式で圧縮されているので、7-Zipなどの解凍ソフトが別途必要である。

　VirtualMIDISynthを起動したら、SoundFontの＋をクリックして、組み込みたいものを選択する。サイズが大きいサウンドフォントの方がいい音がするはずだが、サイズが巨大でもバランスが悪い物もある。ＧＳ対応で主な楽器がそろっているものがいい。ピアノの音など、とくにこだわる楽器は、その楽器だけのサウンドフォントもダウンロードする。矢印をクリックすれば、優先順序が高いサウンドフォントを上に移動できる。例えば、ピアノのサウンドフォントを一番上にして、その下にＧＳ対応のサウンドフォントをおくといい。サックスや弦楽器、打楽器など、さまざまなサウンドフォントがあるので、好みに応じて、ＧＳ対応のサウンドフォントの上に登録する。

　ただし、あまりにたくさん登録しても、音のバランスが崩れるだけなので、どうしてもこだわりのある楽器の音だけ一番上に移動し、高音質だと定評のあるＧＳサウンドフォントを下に置く。気になるサウンドフォントを入手しておき、再生する曲によって、優先したい楽器のサウンドフォントを上に移動させ、音のバランスを考えて調整すればいい。

　それが済んだら、「MIDI　Mapper」のタブをクリックし、「規定のMIDI出力デバイス」をVirtualMIDISynthに指定する。このシンセサイザーはMIDIの設定をするだけで、ファイルを選択して演奏するのは、Windows Media Playerなどである。ここでは高性能のTMIDI Playerを紹介しておこう。

　TMIDI　Playerを起動したら、「オプション」をクリックし、「MIDI設定」の「ポート」でVirtualMIDISynthを、「MIDIマッパー」でCoolSoft MIDI Mapperを指定する。「エミュレーション」のタブでは、ＧＳ対応のサウンドフォントを使用しているなら、と

りあえず「使用音源情報」と「対象音源」をRoland　SC-8850/8820にして、「対象音源を自動判別」にチェックを入れておく。「オプション」の「MIDIポートマッパー」では、「出力ポート」のＡはVirtualMIDISynth、「出力ポート」のＢは、CoolSoft　MIDI　Mapperを、「自動マップ切替」では、ローランドかヤマハのハード音源を指定しておく。ここまで済んだら、「ファイル」から演奏したいMIDIファイルを選択すればいい。フォルダを選択すれば、自動でフォルダ内のファイルを、順次再生してくれる。

　さて、パソコンだけでなく、iPhoneやiPod　touchでもMIDIを楽しみたい方には、bismark　bs-16iというアプリをお勧めしたい。これはiTunes Storeから購入できる、純正なアプリである。

　MIDIを再生するだけでなく、鍵盤を弾いても楽器の音が出る。ただし、演奏するのが目的なら、iPadにインストールした方がいい。iPhoneやiPod　touchでは鍵盤が細すぎる。このアプリはサウンドフォントにも対応しており、パソコンで使用している物を、iTunesのファイル共有機能によって転送するといい。

　bismark　bs-16i　には、30メガ弱のサウンドフォントがついている。サウンドフォントの重ね着も可能である。ただし、iPhoneやiPod　touchでは、複数のサウンドフォントを用意して、演奏する曲に合ったサウンドフォントを、その都度選択した方が無難だろう。

　MIDIの自動演奏は、バーチャルでどこまで本物に近づけるかが楽しみであって、アーティストによる本物の演奏とは比べものにならない。たとえうまく再生されたとしても、個性的な演奏は期待できない。というと、MIDIを否定的に語っているようだが、もう一つの楽しみ方は、演奏する楽器を自由に変えることである。MIDIで作曲したり曲を入力したりしない場合でも、例えば、ピアノ曲をオルガンやギターでの演奏に変えることは、素人しろうとでも可能である。ここで紹介したbismark　bs-16i　では、楽器名のボタンに触れて楽器を変更すれば、普段とは異なる演奏を手軽に楽しむことができる。先述したTMIDI　Playerでも、楽器の番号をクリックして楽器名を変更すれば、同様の操作が可能である。ただし、複数の楽器を使

用している曲で、メインの楽器を変えるだけだと、音のバランスが崩れることが多いので、ピアノやギターのソロを、別の楽器に変更するなどした場合の方が、いい音で楽しめるだろう。

すでに販売が停止されてしまったが、Sound Canvas for iOSが、ローランドのハード音源を、iOSのソフト音源として再現した物として、MIDIを楽しんだ世代の注目を集めた。「SC-8820　マップ」「SC-88Pro　マップ」「SC-88　マップ」「SC-55　マップ」のほか、「GM2」のマップにも対応している。

確かに、Windows95にインストールされていたVIRTUAL SOUND Canvasとは異なる澄んだ音がする。音の輪郭がはっきりしていて、とくに弦楽器や管楽器では際立つ。ただし、鳴り方が人工的なところは、やっぱりSound Canvasである。とはいえ、デモ曲などを聴いていると感動する。バーチャルでこれだけの演奏を、しかも掌に収まるハードウェアから出しているなんて。

一つ一つの音色がきれいで、他の楽器の音とよくまとまっているのは、MIDIファイルの作成では、ローランドのハード音源が使われることが多いからだ。Windows95のVIRTUAL SOUND Canvasに収録されていたファイルも、ローランド製だから遜色のない音を出す。

過去に聴いていたMIDIファイルを、ハード音源と同等の音で再生できるのはうれしいものである。ただし、iPod　touchやiPhoneでは表示できる項目が少ないので、特定のパートのみの演奏をしたりなど、演奏のバリエーションを楽しむには、iPadにインストールした方がよい。余りに多くの曲をiTunesで転送すると、アプリが極端に重くなるから、登録するファイルは選んだ方がいい。登録しすぎて重くなったら、iTunesでファイルを選択して、Deleteキーを押せばいい。MENUでAUTO SLEEP CANCELとBACK GROUND PLAYを設定しないと、画面にロックがかかったり、他のアプリを起動しようとするたびに演奏が中断されてしまう。

なお、WindowsとMacで動くプラグイン・シンセ、SOUND Canvas　VAは、現在でも販売されている。コンピューターのCPUが

許せば、複数立ち上げることもできる点が、iOS版にまさるという。対応はWindows10、macOS10.11～15 (intel Processorのみ)、macOS 11 (intel Processorのみ)である。Windows11やMac12以上では非対応となっている。

MU1000をWindows10で動かす方法

MIDIファイルは楽譜のようなもので、通信手段が貧弱だった頃、インターネットを介して音楽を再生する際に、楽譜だけを配信し、音源は相手のコンピューターの物を使用した。また、DTMで作曲する人が、実際の楽器を使用せずに、コンピューターに演奏させるのにも用いられた。

MIDIの音は機械的で、僕がまだ若い頃は、擬似的にどこまで本物の楽器に近い音を出すかという点に興味を持っていた。MP3のファイルですら、電話線を介してダウンロードするのに20分もかかったので、インターネットのサイトではよくMIDIが使われた。

現在では、MIDIは作曲する人以外には縁がないだろう。MIDIの拡張形式にはヤマハのＸＧとローランドのＧＳがあり、互換性がなかったので、例えばＸＧのファイルをＧＳの音源で再生すると、一部の音が出ないなどの問題が起きた。

パソコンの性能が飛躍的に向上した結果、ソフトウェア音源でもそこそこの音が出るようになったが、少しでもいい音で再生させたい場合には、ハード音源をパソコンに接続して再生したものだ。

四半世紀ほど前に購入したヤマハのMU1000は、放置したまま電源も入れていなかった。パソコンでMIDIを再生することもなく、最新のＯＳではＭＵのファームウェアなど対応していないだろうと思い込んでいた。

ところが、ＭＵのファームウェアはWindows10や11でも作動することを知ったので、動くかどうか電源を入れてみた。果たして以前のようにランプがついた。そこでヤマハのページに行き、MU1000のファームウェアをダウンロードした。ＭＵをUSBでパソコンとつないで電源を入れたら、ダウンロードしたファームウェアをインストールする。

Windows10や11では、MIDI音源を選択するMIDIマッパーが廃止されている。そこで、MIDIマッパーの代用となるソフトウェアをイ

ンストールした。CoolSoft MIDI Mapperである。

　サイトからダウンロードし、インストールしようとすると、Windowsが拒絶するので、詳細情報をクリックし、自己責任で実行してインストールする。これによって、Windows Media PlayerなどでMIDIファイルを再生する際に、CoolSoft MIDI Mapperによって、ＭＵのハード音源が選択できるようになる。

　もっと手軽な方法は、ヤマハのMidRadio　Playerを使用する方法である。カラオケの歌詞を表示する機能が付いている。内蔵のソフトウェア音源は同時発音数が32音だが、MU1000なら128音再生できる。ＸＧ音源ではあるが、ＧＳへの互換モードがある。ただし、必ずしもＧＳファイルの設定通りに鳴るわけではない。

　これで準備完了なので、実際に音を鳴らすことにした。Edifierのアクティブスピーカー　S1000Wに接続すると、きちんと音が再生された。ただ、やはりコンピューターらしい、いかにも機械的な音である。当時はmp3の音楽で満足していたから、MIDIの音にも不満はなかったが、現在はＣＤ音質にも不満で、ハイレゾでなければ満足できないようになっている。耳が肥えてしまったせいで、高性能のスピーカーから音を出すと、機械的な音の性質が増幅されたように聞こえた。

　MIDIには基本的なＧＭのほかに、ヤマハのＸＧとローランドのＧＳという拡張規格があることはすでに述べた。Windows98を使っていた頃、ヤマハのソフトウェア音源、S-YXG100plusというのを買った。これは最大同時発音数が130で、音量やテンポ、エフェクトなどの操作ができるほか、管楽器・弦楽器をリアルに再現するバーチャルアコースティック音源と、人間の声を再生できるフォルマントシンギング音源が付属していた。前者は通常のMIDIでは再現度が低い管楽器や弦楽器に特化した音源である。後者はコンピューターに歌わせる音源で、VOCALOIDの前身とも言えるものだった。

　非常に多機能だった音源も、ＯＳがWindowsXPになると動かなくなった。本来ならＯＳのバージョンアップとともに、サポートが継続されて然るべきだが、MIDIに対する需要がなくなっていったた

め、ヤマハはソフトウェア音源ＸＧ自体のサポートをやめてしまった。したがって、危険を冒して裏技を使うか、MidRadio　Playerの内蔵音源で我慢しない限り、ＸＧ規格のファイル再生は、ヤマハから発売された中古のハード音源を使用するしかないのである。

四半世紀前に購入したMU1000は、十年以上も電源を入れずに放置していたが、Windows10や11でも動かせることを知り、懐かしさとともに、過去の技術となりつつあるMIDIに、再び興味を持ったわけである。

ところで、MIDIへの関心を失っていたため、大量に保持していたMIDIファイルの行方が分からなくなっていた。すぐに見つかったファィルは、個人が趣味で制作したもので、必ずしも技術的に優れていないため、いかにも機械的で味わいが乏しかった。プロが制作したMIDIファイルは、実際の演奏に近いほどの技術的な高さがあるのに。

MIDIファィルの制作には、DTMのソフトウェアで、手作業で打ち込んでいくものと、MIDI機能を搭載した鍵盤で、演奏した情報をファイルに記録する方法がある。前者であっても、エフェクトを巧みに使用すれば、実際の演奏に近い音が出せるのだが、やはりプロの演奏によるファイルにはかなわない。

僕はMU1000を購入した後、追加できるシンセサイザーボードPLG150-VLと、PLG150-PFを本体に組み込んでいた。ただ、専用に制作されたMIDIファイルがどこに行ったか分からない。キーボードが壊れて使用していないWindows8.1が何とか立ち上がったので、かつて保持していたMIDIファイルをすべて取り戻すことができた。

さて、PLG150-VLは管楽器・弦楽器に特化したバーチャルアコースティック音源のシンセサイザーボードで、空気の流れや弦の震えを忠実に再現しながら、シンセサイザーらしい人工的な面白さを持っている。未来を想起させる楽曲に、感激したのを思い出した。

一方、PLG150-PFはグランドピアノや、電子ピアノなどの鍵盤楽器を、高音質で再現する音源。MU1000自体も1396楽器音＋58ドラムキットを搭載しており、ソフトウェア音源のS-YXG100plusが480

の楽器音と11ドラムキットだったのと比べれば、かなり高性能なわけだが、曲を合成する音の波形に限りがあるため、シンセサイザーボードをプラスすることで、圧倒的な高音質を実現するのである。
　追加するシンセサイザーボードには、VOCALOIDの前身となったPLG100-SGや、ハーモニーをつけるPLG100-VH、アナログ物理音源のPLG150-AN、シンセサイザーDX7の音を出すPLG100-DX、ドラム音源のPLG150-DR、パーカッション音源のPLG150-PCなどが発売されたが、MU1000に組み込めるのは、最大３枚のシンセサイザーボードである。

　MIDIファイルを再生するだけだったら、ヤマハのMidRadio Playerで十分なわけだが、MIDIの面白さは、MIDIファィルの設定をいじることなく、プレイヤーで一時的に楽器を変更して演奏させられるという点にある。ヤマハのXGworksは販売が終了しており、フリーのソフトとしては、先述したTMIDI Playerがある。
　WindowsNTで動いていた古いソフトなのだが、Windows10や11でも問題なく動くことが分かった。インストールしたら、起動する前にMU1000をパソコンに接続して電源を入れておくこと。それが終わってから、TMIDI Playerを起動するようにする。ちなみに、MU1000などのハード音源を持っていなくても、Windowsにはデフォルトでmicrosoft GS Wavetable Synthというソフトシンセサイザーがインストールされているので、ハード音源なしでもTMIDI Playrtを使って、MIDIファイルを鳴らすことができる。
　TMIDI Playerを起動したら、「オプション」「MIDI設定」でポートを設定する。ポートＡにはMU1000（ハード音源がない場合はMicrosoft GS Wavetable Synth）を指定する。とりあえず、ポート１を指定しておけば音は出るようである。「エミュレーション」では、TMIDI Playerをどの音源に模倣して鳴らすか設定する。MU1000の場合は「使用している音源」も「デフォルト対象音源」もMU1000と入れておく。ヤマハのハード音源なら、ローランドのＧＳファイルでも、ヤマハの音源で擬似的にＧＳ風に鳴らしてくれる。（なお、「使用している音源」がMicrosoft GS Wavetable

Synthの場合は、「デフォルト対象音源」を、ローランドのハード音源SC-8850などに指定しておく。）

次に、「MIDIポートマッパー設定」で、「使用楽器」をMU1000（ハード音源がない場合にはMicrosoft GS Wavetable Synth）に指定する。「自動ポートマップ切替」では、ファイル制作に使用されたと思われるヤマハやローランドの音源をすべて指定しておく。

設定が終わったら、実際にMIDIファイルを開くと、TMIDI Playerが音楽の演奏を始める。「ウインドウ」を「演奏モニタ」に指定すると、画面に使用している楽器名と、弾いている音の鍵盤などが表示される。MU1000にPLG150-VLやPLG150-PFなどのプラグインを装着している場合も、鳴らしている楽器の名前は表示される。

さて、MIDIファイルをいじらずに、演奏している楽器を変える方法だが、Instrument（楽器）と書かれた下の数字をクリックすると、表示される楽器が変更され、実際に演奏に使用する楽器も変わる。同一のファイルで演奏する楽器が変えられるのも、MIDIの面白さの一つである。

## ジャズ名曲50選

二〇〇〇年代の初め、まだインターネットの常時接続が珍しかった頃、音楽をサイトで配信するのは難しかった。モデムで電話回線につないでいると、１曲ダウンロードするのに20分もかかった。MIDIはまだ健在だった。MIDIは楽譜のようなもので、それさえダウンロードすれば、パソコンにインストールされている音源が、仮想的な演奏をする仕組みである。

僕はヤマハから出ていた『ジャズ名曲50選』というソフトを買った。定価三五〇〇円の物が半値で売られていたからだ。ジャズの世界について、まだ知識が乏しかったし、演奏とともにスライドや曲の解説が表示されるのも魅力だった。今から思えば、決していい音ではなかったが、オルゴールみたいな音しか出せなかったパソコンが、生の楽器に近い音を出すこと自体、当時としては感動的だったのである。

パソコンがWindows98からＸＰに切り替わると、愛用したこのソフトも動かなくなった。ヤマハはMIDIのソフト音源からも手を引いてしまった。『ジャズ名曲50選』も埃をかぶって放置されていたが、最近、冗談半分でWindows7にCD-ROMを入れてみた。ヤマハのWindows95系統のＸＧソフト音源を、WindowsNT系統のパソコンにインストールすると、システムに重大な障害が生じるので、決してインストールしてはいけない。

DVDのドライブにCD-ROMを入れて、jazzf.exe、またはjazzw.exeを互換モードで実行する。「互換性がない」という表示は出るものの、前者では大画面、後者では小画面が起動する。ＸＧのソフト音源はインストールされていないから、パソコン付属のＧＳ音源で演奏するしかないが、懐かしい画面で聴くことができた。

『ジャズ名曲50選』はヤマハの「くつろぎおんがくシリーズ」というMIDIのソフトウェアの一つで、『クラシック名曲100選』『ピアノで聞く名曲100選』『ラテン名曲50選』も購入した。ＸＧ対応

のソフトシンセサイザーMIDXtraが、収録されたMIDIファイルを音楽として再生する物で、MIDIチャンネルブロックや、演奏する楽器の変更などもできた。

　WindowsXPの時代になり、付属のソフトシンセサイザーが動かなくなった。無理にインストールすると、パソコン自体にトラブルが生じる恐れがある。それなら、MIDIドライバ設定を他の物に変えればいいと気づいた。Windowsに付属するMicrosoft GS Wavetable Synthに変えると、ＧＳ音源でＸＧとは互換性がないために、劣化した音でしか再生されなかった。

　さらに、Windows10や11では、MIDI音源を選択するMIDIマッパーが廃止されたので、MIDIの音源を選択することさえできなくなった。そのため、MIDIマッパーの代用となるCoolSoft MIDI Mapperをインストールしなければいけない。

　Windowsにインストールを拒絶されたら、詳細情報をクリックし、自己責任で実行してインストールする。これでMIDIドライバ設定により、MIDIの音源を自由に選ぶことができるようになった。

　ただ、ヤマハのハード音源ＭＵなどがない場合は、サウンドフォントで動くソフトシンセサイザーが別途必要となる。フリーのVirtualMIDISynthをダウンロードしてインストールする。

　CoolSoft MIDI Mapperを起動したら、Default MIDI deviceをVirtualMIDISynthにして、Applyをクリックする。次に、MIDIファイルを鳴らすためのサウンドフォントを入手する。
VirtualMIDISynthを起動したら、SoundFontの＋をクリックして、組み込みたいものを選択する。矢印をクリックすれば、優先順序が高いサウンドフォントを上に移動できる。次に、「MIDI Mapper」のタブをクリックし、「規定のMIDI出力デバイス」をVirtualMIDISynthに指定する。ちなみに、このソフトシンセサイザーはMIDIの設定をするだけで、MIDIファイルの再生自体は、他のソフトウェア、Windows Media PlayerやMidRadio Playerなどで行う。

　ここではくつろぎおんがくシリーズの『ジャズ50選』を、VirtualMIDISynthで動かすので、CD-ROMをドライブに入れたら、

jazzf.exe、またはjazzw.exeをクリックする。この操作ではパソコンへのインストールは行われない。間違ってもセットアップをして、Windows95/98用のソフトシンセサイザーMIDXtraをインストールしないように。

　パソコンに『ジャズ50選』が画面に現れたら、MIDIドライバ設定でVirtualMIDISynthを選択すればいい。これで再生したい楽曲を、映し出される写真と解説を見ながら聴くことができるようになった。

音源の選択について

MIDIを最高の音質で聴きたければ、ヤマハのＭＵシリーズや、ローランドのＳＣシリーズを、中古で購入するしかない。ヤマハのＸＧとローランドのＧＳには互換性がないと言われてきたが、実際には簡易的な互換モードがあり、手の込んだ作りのものでなければ、ヤマハの音源でＧＳファイルを再生しても、ローランドの音源でＸＧファイルを再生しても、ほどほどの再生はしてくれる。

高価なハード音源は、なかなか入手できないので、パソコンにインストールされたソフトウェア音源で、MIDIファイルを再生することが多かった。ただ、MIDIの退潮を察したヤマハは、ＸＧ対応のソフトウェア音源の開発から手を引いてしまった。一方、ローランドはパソコン用のSound Canvas VAと、スマホ用のRoland-Sound Canvas for iOS を売り出した。ＧＳの音源以外にも、拡張されたハード音源の音も含んでいるので、ローランドの機器を使用して作成されたMIDIファイルは、ほぼ忠実に再現できるようだ。ただ、スマホ用のRoland-Sound Canvas for iOSは、すでに販売が中止されている。

では、投資をせずにMIDIファイルを聴くにはどうしたらいいか。WindowsにはMicrosoft GS Wavetable Synthが搭載されているが、ＧＳの名を冠しながら、再現度はかなり低い。ヤマハのＸＧファイルなら、無料のMidRadio Playerを使用すればいい。バージョン６の方がかつてのヤマハの音源に近く、７の方が生楽器に近い音を出してくれる。ＸＧの簡易モードなので、ヤマハのハード音源で作成されたファイルなどは、原音とは違う音が出てしまうかもしれない。

ＧＳファイルの場合、Sound Canvas VAならほぼ忠実に再生されるだろうが、投資したくない場合には、無料のDTMソフトを音源として使用するという方法がある。Cakewalk by BandLabはかつてローランドで販売されていたSONARが、無料ソフトウェアとして公開されたもので、TTS-1という音源が付属している。256＋9ドラム

セットで、生楽器に近い音を出している。ＧＳの音の一部はカバーしていないので、曲によっては出ないパートがあるかもしれない。

　手間をかけても、高音質で聴きたい場合は、サウンドフォントに対応したTiMidity＋＋や、VirtualMIDISynthとTMIDI　Playerを使用する方法がある。TiMidity＋＋に関しては、かなり以前に開発が止まっているので、先述したVirtualMIDISynthとTMIDI　Playerを連携した方法が無難だろう。サウンドフォントは、サイズが大きいほど生楽器に近い音を出すが、サイズが大きくてもバランスに欠けるものもあり、どのように組み合わせるかによって聞こえ方がかなり異なる。

SOUNDCanvas for iOSをステレオで聞く

僕はヤマハのMU1000を持っているので、ＸＧのファイルばかりでなく、ＧＳファイルも再生することができる。ローランドのＧＳへの互換性があるからである。ただ、ローランドのハード音源にはSC-8820、SC-88pro、SC-88、SC-55などがあり、SOUNDCanvas for iOSなら、ＧＳから拡張されたファイルも再生可能なのである。
ただ、このアプリは開発が終了しており、新たにダウンロードすることはできないし、iOSを16.6にアップデートすると、動かなくなってしまう。したがって、使い続けたいのであれば、iOSの自動アップデートは止めておいた方がいい。
何でこんなことにこだわっているのかと言えば、ＧＳへの互換性があると言っても、ローランドのハード音源で制作されたMIDIファイルは、ＸＧの音源では、本来の音で再生されないからである。
パソコン用のSOUND Canvas VAは現在でも販売されているが、Windows10までで11には対応していない。しかも、VSTのプラグインなので、別途シーケンスソフトが必要で、再生する曲ごとにVSTを立ち上げなければならない。というのも、シーケンスソフトはMIDIファイルを作成するソフトウェアなので、再生をもっぱらするスタンドアローンではないからだ。VSTの音源をスタンドアローンとして動かす方法もあるのだが、Windows11ではうまくいかない。
結局、ローランドのハード音源で作られたファイルを、正確に、かつ容易に再生するソフト音源は、現状ではSOUNDCanvas for iOSしかないようである。
そこで、Bluetoothを使って、SOUNDCanvas for iOSでファイルを再生し、AlexaのEcho Studioから演奏させてみた。複数のスピーカーが円筒の本体に内蔵されているのだが、一台では音の立体感が足りない。
自分の部屋にはEdifier S1000Wというアクティブ・スピーカーがある。アンプを内蔵したスピーカーで、中国製ではあるが繊細でかつ、重厚な音を出してくれる。Bluetoothに対応している。そこで、

AirDropからの出力も試みた。SOUNDCanvas for iOSの左の上に出力先の設定がある。Edifier S1000Wから演奏させると、ローランドらしいくっきりと明るい音が、深みをもって再生された。

VSTをWindowsのMIDI音源にする方法

かつてはMIDIを再生するために、ソフトウェア音源が用いられていたが、ヤマハはYAMAHA　S-YXG50のサポートを終了してしまった。ローランドのSoundCanvasも、iOS版はサポートを終了し、Sound Canvas VAもWindows11には対応していない。

Sound Canvas VAはプラグインVSTであり、 YAMAHA S-YXG50にもVST版がある。VSTはシーケンスソフトのプラグインであり、MIDIファイルを作成するためのもので、再生するには曲ごとにプラグインを立ち上げなければならず、決して使い勝手がよいものではない。

それなら、プラグインのVSTをWindowsのデフォルトのMIDI音源にしてしまう方法がある。それがVST MIDI Driverである。なお、対応しているVSTはVST2のプラグインまでで、拡張子はdllのものである。VST3には対応していない。

そのページのvstmididrv.exeをクリックするとダウンロードできる。インストールしようとすると、Windows11ではインストールを拒絶するので、自己責任で「設定」をクリックしてインストールする。Configure VST MIDI Driver(64bit)を起動したら、Load VSTi…をクリックし、再生させたい音源のVST（拡張子はdll）を選択する。

次に、廃止されたMIDI　Mapperの代わりに、CoolSoft MIDIMapperをインストールする。

これによって、Windowsで再生する際の音源を選択できるのである。VST MIDI Driverを使用するには、VST MIDI Syhth（Potr A）を選び、Applyをクリックして閉じる。

これでデフォルトのMIDI音源を設定できたわけだが、MIDIファイルを再生するソフトとしては、TMIDI Playerが秀逸である。

古いソフトではあるが、Windows11でも問題なく動いている。インストールしたら、「オプション」から「MIDI設定」に移動し、ポートＡでVST MIDI Syhth（Potr A）を選択して「適用」をクリッ

クする。

　この方法を用いれば、YAMAHA S-YXG50のVST版を、Windowsのデフォルトの音源とすることができる。TMIDI PlayerでYAMAHA S-YXG50の音を聞く場合、同時発音数がハード音源の10倍以上にもなったりするので、ソフト音源とは思えないほどの迫力ある音になる。ヤマハのＸＧだけでなく、ローランドのＧＳにも互換性がある。

　そればかりではない。Windows11に対応していないはずのSound Canvas VAさえ、VST MIDI Driverで選択すれば、WindowsのMIDI音源にすることができるのである。ＧＳのファイルを再生するには、やはりSound Canvas VAの方が向いている。こちらも非公式にはＸＧモードがあるらしいが、YAMAHA　S-YXG50のＧＳモードほど完全ではない。また、Sound Canvas VAは一つ一つの音はリアルなのだが、どこかコンピューターっぽい感じがする。全体としての調和や生楽器らしさは、YAMAHA　S-YXG50の方が上の気がする。まあ、これは好みの問題だろうが。

　以前、サウンドフォントを使用する方法を紹介した。サウンドフォントは大容量のものもあるが、各楽器のバランスがよくないことが多い。多数の楽器を使用するファイルの場合は、VST MIDI DriverでYAMAHA S-YXG50やSound Canvas VAを鳴らした方が、バランスの良い演奏をしてくれる。

AndroidでMIDIを楽しむ

なぜ今、AndroidでMIDI？　と思われるかもしれない。パソコンを買い換えて、再び複雑な設定をするのかと思っていたが、実はAndroidでも高音質の再生が、簡単にできるのを最近知った。MIDI Player(Volcano　Mobile　SNC)ならサウンドフォントも使えるからである。

事前にパソコン内のMIDIファイルをまとめて、Androidの本体に転送しておく。Google Playストアで無料版をダウンロードして起動する。Android内のMIDIファイルへのアクセスを求められたら、許可をすればただちにMIDIファイルを鳴らすことができる。

ただ、デフォルトの音源では満足できない場合は、MIDI PlayerをPremium版にアップグレードする。450円支払っても、Premiumにアップロードできない場合は、いったんAndroidからMIDI　　Player(Volcano　Mobile　SNC)をアンインストールして、改めてダウンロードし直すと、無料版ではロックされていた機能が使えるようになる。

サウンドフォントが使えるようになったら、手持ちの物で試してみればいいが、サウンドフォントの多くはＧＳ向けに作られているので、ＧＳの曲なら再生されても、ＸＧのファイルだと、別の楽器が鳴ってしまったり、楽器の一部の音が鳴らなかったりする。そのためには、ＸＧ対応のサウンドフォントを探す必要がある。ＸＧを名乗るサウンドフォントで、バランスが良くいい音で鳴るのはYamaha XG Sound Set (Remap)である。

演奏の前に細かな設定をしておいた方がいい。Polyphonyは一度にいくつの音を鳴らすかで、64から1024まであるので、スマホの性能に合わせて調整する。Bank　Modeはバンク切替モードで、GMとGS、XG、MMAがある。MMAに設定すると、GMの音しか鳴らない。ファイルによって、ＧＳかＸＧに手動で切り替えなければいけない。不明の場合は、とりあえずＧＳに設定しておく。Reverbは音に反響をつけるか、Chorusは音に厚みを与えるかで、ともにチェッ

クを入れておいた方が、演奏がより自然な感じになる。
　ただ、容量の小さなサウンドフォントだと、たとえバランスが良くても、チープな音になってしまいがちである。生の楽器の音色に近い音を求めるなら、数ギガのサウンドフォントでバランスのいい物を探す必要がある。お勧めなのは、Hidef.sf2である。3.94ギガもあるので、古いスマホだとフリーズしてしまう。モトローラのスマホは、安価な物でも再生可能なので驚いてしまった。この音色を聴いたら、他のサウンドフォントなど、もうお払い箱である。
　それにしても、MIDI PlayerのPremium版は高性能である。わずかの出費とサウンドフォントの入れ替えで、これほどいい音を出すのだから、パソコンでやっていた複雑な設定ともおさらばである。
　なお、MIDIの場合には、ファイルの読み込みから再生までにタイムラグがある。重いサウンドフォントの場合はなおさらである。読み込みに10秒以上かかることもある。すぐに音が出ないからといってあわてないこと。